ピンク

春日信彦

亜紀ちゃんシリーズ⑩オリーブ園で拾われた子猫は、ピンクと名付けられ亜紀ちゃんのおうちで元気に育っていた。風来坊は、

パパの教え

1月3日（木）亜紀ちゃん家族は、今日からお店を開けるということで、自宅の西側向にある甘党茶屋で楽しそうに働いていた。多少肌寒かったが、好天に恵まれ、客足も好調だった。お店にいると仕事の邪魔だと言われたスパイダーとピンクは、お留守番をさせられていた。ピンクは、昨年4月に糸島市曽根にあるオリーブ園の片隅でニャ～ニャ～と鳴きながら母親を探していた捨て猫だった。短足の白い子猫は、ピンクと名づけられ、亜紀ちゃんのおうちでスクスクと育てられた。人間であればJCといったところでオテンバ娘になっていた。

昨年、4月、桜の花が散り始めたころ、オリーブ園西側近くにある鉄塔から子猫の様子を観察していた風来坊は、あたかも、偶然発見したかのように、「曽根オリーブ園でかわいそうな赤ちゃん捨て猫を発見した」と亜紀ちゃんに伝え、ニャ～ニャ～泣いている白い子猫の様子を話した。亜紀ちゃんは、放っておくと餓死するかもしれないと思い、1キロほど南にあるオリーブ園まで全速力で救出に向かった。亜紀ちゃんは、オリーブ園の片隅でニャ～ニャ～と甲高い声で泣いていた子猫を拾い上げると懐に収め、しっかりと抱っこして、揺らさないように早歩きで自宅に持ち帰った。きっと、天国に旅立ったピースの生まれ変わりに違いない、と思った亜紀ちゃんは、アンナの反対を押し切ってでも、家で飼うことを決意した。

アンナは、やっとペットが一匹減ってホッとしていた矢先、またもや、猫を飼う羽目に追い込まれうんざりした。でも、悲しんでいる亜紀ちゃんが、元気を取り戻せるのであれば、やむを得ないと思い、亜紀ちゃんの必死の願いを聞き入れた。亜紀ちゃんは、ピースがいなくなり悲しんでいたが、ピンクを無我夢中で育てることでどうにか元気を取り戻すことができた。悲しんでいた亜紀ちゃんを励まそうと、スパイダーは犬ではあったが、パパとして必死に幼いピンクの面倒を見た。実の両親を知らないピンクであったが、今では、育ての親である亜紀ちゃんをママ、スパイダーをパパと思い込んでいる。特に、パパのスパイダーにいつも甘えている。

拾われて10か月目を迎えたピンクは、ピョンピョンと短い脚で家じゅうを駆け回るようになり、また、かなり知恵もついてきていた。そこで、スパイダーは、これから人間社会で生き抜いていくために必要な心得をピンクに聞かせてやるチャンスをうかがっていた。だれもいない今日は絶好のチャンス、と思ったスパイダーは、キッチンでウロウロしていたピンクを呼び寄せ、ソファーに腰掛けるように指示した。元気よく跳び上がったピンクは、ソファーに腰掛けた。

スパイダーは、ピンクに向かって正座するとマジな顔つきで話し始めた。「ピンク、よく聞くんだぞ。今から、我々動物が、人間社会で生き抜いていくための心得を話す。しっかり、心にとどめておくように」世間を知らないピンクに、突然難しい話をしても理解できそうもないから、まず、スパイダーは、家族について話すことにした。「ピンク、気を楽にして聞くがいい。ママは亜紀ちゃんで、パパはスパイダーだ。亜紀ちゃんは人間で、スパイダーは犬だ。ピンクは猫だな。猫のパパとママが、ピンクを育てるのが、本来の姿なのだが、どういういきさつかはわからないが、ピンクは亜紀ちゃんのうちに引き取られた。だからといって、いいか、実のママを恨んではいけない。実のママにとって、ピンクと離れ離れに暮らすことは、とっても悲しかったに違いない。おそらく、実のママを飼っていた人間が、ママとピンクを強引に引き離したに違いない。このようなことは、人間社会ではよくあることだ。言ってることがわかるか？」

ピンクは、実の親はどこにいるのだろうと一瞬思ったが、猫のママとパパがはっきりと想像できなかった。やっぱ、目の前にいるスパイダーこそが大好きなパパだと思い、スパイダーを見つめて小さくうなずいた。ピンクにとっては、少し難しい話のように思えたが、スパイダーもうなずき返し、話を続けた。「人間をあまり怖がることはないが、人間の恐ろしさを知るということは、我々動物にとっては、とても大切なことだ。亜紀ちゃんは、人間の中でも動物に優しい人間だ。だから、信用してもいい。俺も、亜紀ちゃんにかわいがられたからこそ、今まで生きてこられた」スパイダーは、身近にいる危険人物について話すことにした。

スパイダーは、万が一、アンナが聞いていたなら、追い出されるかもしれないと思い、一呼吸おいて、ゆっくりと目を凝らして周りの様子を伺い、小さめの声で話し始めた。「このうちにバカでかい女がいるだろ～。なぜだかわからんが、あの手の顔が、世間では美人といわれている。一見、善人そうに見えるバカデカ女は、亜紀ちゃんのママで、名前は、アンナという。でも、このアンナは、ちょっと警戒しなければならん。ちょっと機嫌が悪いと犬であれ猫でも、八つ当たりで蹴飛ばすことがある。俺なんか、今までなんどケツを蹴飛ばされたことか。まったく、亜紀ちゃんのママとは思えないほどのハラグロ女だ」

人間の性格については、ピンクにとってちょっと難解な話で、寝落ちしそうになった。スパイダーに叱られたらいけないと思ったピンクは、気を引き締めて、確認するように、質問した。「要は、亜紀ちゃんは信用していいけど、亜紀ちゃんのママは信用しちゃいけない、ってことね。そういうこと？」スパイダーは、うなずいた。「まあ、そういうことだ。アンナに限らず、エサをくれるからといって、信用をしてはならん、ということだ。中には、極悪な人間がいる。ピンクのようなかわいい猫をエサでおびき寄せて、誘拐（ゆうかい）するんだ。そして、売り飛ばす悪人がいる。そう、人間というやつは、カワイ～動物を好む。そして、カワイ～猫は特に高く売れるんだ。ピンクが外を出回るときは、十分注意しなくてはならん。いいな。でも、決して、おびえることはない。外に出かけるときは、亜紀ちゃんとスパイダーが、守ってやるから、安心するがいい」

話を聞いていたピンクは、人間が怖くなってきた。人間は、亜紀ちゃんのようにみんなやさしいと思い込んでいた。ピンクは、体を震わせながらうなずいた。ピンクを怖がらせているようだったが、スパイダーは、ピンクのためと思い、もっと怖い話をすることにした。「それと、道端やゴミ捨て場にある食べ物を食べてはいけない。毒が入っていることがある。毒を食べると動物でも人間でも死んでしまう。この世で最も怖いものだ。ピンクは、箱入り娘だから、まったく、人間に対して警戒心がない。いいか、信用していいのは、亜紀ちゃんとスパイダーだけだ。俺は、犬だが、ピンクを我が子のように思っている」

ちょっと話が難しくなり、頭が混乱してきた。そして、信用していた周りの人間が怖くなってきた。ピンクが首をかしげて質問した。「わかった。時々、頭をナデナデしてくれるチッコイ人間は、どうなの？」スパイダーは、さやかのことを言っていると直感した。「ああ、さやかのことだな。このうちに同居しているチンチクリンのチッコイ女は、さやかというんだ。小学生のようだが、あれでも、立派な大人らしい。さやかとアンナの関係はよくわからんが、アンナとさやかは、とても仲がいい。幼い時からの友達に違いない。さやかは、動物にはやさしいようだが、本当にやさしいかどうか、いまだはっきりしない。人間は、突然、鬼のようになるからな。決して、油断してはいけない。やはり、アンナと同じく、さやかも信用しないほうがいい。でも、アンナとさやかは、毒を食べさせるような極悪人ではない。もし、二人が極悪人であれば、俺は、とっくの昔に、殺されていただろう」

ピンクは、アンナとさやかは極悪人いでないと聞かされ、ホッとした。ピンクは、平原歴史公園のベンチで、時々出くわす白いカラスについて質問した。「それじゃ、白い羽の生えたカ～カ～って鳴くあの鳥は、信用していいの？」スパイダーは、風来坊のことはよくわからなかったが一応話しておくことにした。「あ～～、あの白いカラスか。あのカラスは、風来坊といって、奇妙なカラスだ。ほとんどのカラスは、黒いんだが、なぜか、あのカラスだけは白い。風来坊も、自分がなぜ白いのかは、全く分からんといっていた。風来坊は、亜紀ちゃんから聞いたんだが、東京からやってきたらしい。東京というのは、ここから北に、900キロほど離れたところだ」

ピンクは、東京とか、北とか、900キロとか、言われても、全く初めて聞く言葉で、さっぱりわからなかった。でも、眠気をこらえて、わかったような顔をして聞いていた。ピンクの表情からして、あまり理解していないように思えたが、スパイダーは、学校の先生になった気分で、胸を張って話を続けた。「風来坊は、いいやつか、悪いやつか、よくわからん。カラスは、人間でもなければ、犬や猫でもない。数千キロも空を飛べるモンスターだ。確かに、風来坊は人間並みに賢いが、白いカラスだからといって、信用しないほうがいい。黒いカラスは、小鳥や人間を攻撃することがあるらしい。猫だからといって、攻撃されないとは言い切れない。用心することに越したことはない。もし、攻撃されたら、一目散に逃げることだ。猫パンチで立ち向かうんじゃないぞ。まったく、勝ち目はない。なんせ、恐ろしく鋭いくちばしを持ってるからな」

次に、ピンクは、ミンミンミ〜〜ンとセミが鳴く蒸し暑かったころ、ちょっとだけお話した黒猫のおばさんを思い出し、質問した。「そいじゃ、ずっと、ずっと、前に会った黒猫のおばさんはどう？やさしそうな猫だったけど」黒猫の卑弥呼女王は、ピースと同じくちょっと気取ったところがあって、スパイダーはかなり苦手だった。でも、卑弥呼女王は糸島の女王猫だから、そのことは知らせておくべきだと思った。「いやな、猫の世界のことはよくわからんが、あのお方は、卑弥呼女王といわれていてな、糸島の女王猫らしい。今は亡き高貴なピースが言っていた。犬にとっては、どうでもいいことなんだが、猫のピンクにとっては大切なお方だ。猫の世界のことを教えていただけるお方だから、機会があればお話を聞くがいい。いまだ、どこに住んでおられるか知らんが、時々、姫島に行かれると見えて、姫島の様子を話してくれる。おそらく、旅好きなんだろう」

高貴なピースと聞いたピンクは、ピースに興味がわいた。「ね〜、高貴なピースって、猫なの？」ピースについては、ピンクには話していなかった。あまり好きではなかったが、やはり、思い出すとつらくなるからだった。「まだ、話していなかったな。ピースというのは、ピンクと同じ猫だ。でも、ピースは、よくしゃべるシャムネコで、ちょっと苦手だった。ピースはすぐに自慢話をしてな。自分は、フランス生まれの血統書付きの猫だとか、美猫・コンテストで優勝したとか、よく自慢話をしていた。まあ、性格は悪いとは言わないが、ちょっと上から目線の話し方には、イラッと来た。教養はあるようだったが、あんたは美意識がないだとか、下品だとか言って、オレをバカにするんだ。まったく、高貴なお嬢様には参ったよ」突然、胸が苦しくなり、言葉が途切れた。

ピースの思い出話をしていると、手足が長く、気品のある毛並みにサファイアのような目を輝かせたピースの姿が、脳裏のスクリーンいっぱいに現れた。いたずらばかりしていたヤンチャだったころ、いつも叱られていたが、一番の遊び相手であり、頼りにしていたお姉さんであった。目頭が熱くなり、ドッと、涙があふれ出そうになったが、グッと涙をこらえて、元気な声で話し始めた。「いや〜〜、あの時は、びっくりした。ピースが、食欲がないといって、何も食べなくなった。そして、寝込むようになった。どんなに気丈でも、病気には勝てなかった。みんなに看取られて、天国に行っちまった。今となっては、ピース姉さんに、かわいがってもらっていた子供の頃が懐かしい。もっと、仲良くすればよかった」スパイダーの目頭から、ポタポタと涙が流れ落ちた。

　ピンクには、スパイダーの涙の意味がよくわからなかった。というのも、ピンクは、別れることの悲しみをまだ知らなかったからだ。遊び盛りのピンクは、最近、猫の友達が欲しくて仕方なかった。犬のスパイダーは、やさしかったが、遊び相手としてはイマイチだった。ピースが猫と聞いて、ますます猫友達が欲しくなった。「ね～、スパイダー、近所に猫はいないの？やっぱ、猫の友達がいないと、つまんない。ね～～、遊び相手になってくれそうな猫はいないの？」スパイダーは、ちょっと困った。近所をウロウロしてはいたが、飼い猫と出くわすことがなく、近所にどんな猫が飼われているか全く分からなかった。知っている猫といえば、卑弥呼女王だけだった。「そうか。やっぱ、猫友が欲しいのか。あ、そうだ。卑弥呼女王に尋ねるといい。きっと、猫友を紹介してくれる」

　ピンクは、早速、卑弥呼女王に会いたくなった。「ね～、公園に行ってみようよ～。卑弥呼女王に会えるかも。いいでしょ、スパイダー」スパイダーは、ちょっと首をかしげて考え込んだ。亜紀ちゃんに黙ってピンクを連れ出せば、きっと大目玉を食らう。万が一、ピンクにカゼでも引かせたら、それこそ、ケツを蹴飛ばされて、今夜はゴハン抜きだからね、といわれるかもしれない。スパイダーは、ガラス戸の窓から空を見上げピンクに尋ねた。「ピンク、晴天でも、外は寒いぞ。それでも、公園に行きたいか？」

　ピンクは、外が寒いということをすっかり忘れていた。でも、卑弥呼女王に会えるかもしれないと思うと、どうしても公園に行ってみたくなった。「行く。寒くても行きたい」スパイダーは、ピンクのはやる気持ちは分かったが、今一つ踏ん切りがつかなかった。獰猛（どうもう）な犬がやってきて、ピンクがかみ殺されるかも。極悪人がピンクをさらっていくかも。車に引き殺されるかも。次々と悪い予感が、湧き上がってきた。万が一のことを考えると行くべきではないように思えてきた。その時、玄関の扉が開くガラガラという音が響いてきた。

亜紀ちゃんと即座に気づいたスパイダーは、ガシガシガシとフロアをひっかく爪の音を響かせ、玄関に一目散にかけていった。ピンクもソファーから跳び降り、スパイダーを追いかけるように短い脚をチョコマカと動かし必死にかけていった。亜紀ちゃんは、スパイダーのあわてた様子を見て、大きな声で注意した。「スパイダー、フロアを走っちゃダメって言ったでしょ。何度言ったら、わかるの。静かに歩きなさい。ピンクがマネをするじゃない。ほら、ピンクが勢いあまって、転んだじゃない」短足のピンクは走るのが苦手で、フロアが滑るためよく転んでいた。「ちゃんと、お留守番できたの？スパイダーは、パパなんだから、いい見本を見せなくちゃ。わかってるの？まったく、いつまでたっても、ヤンチャ坊主なんだから。ピンク、大丈夫？」亜紀ちゃんは、首をかしげて見上げていたピンクを両手で持ち上げ胸元で抱っこした。

亜紀ちゃんは、スパイダーとピンクが外に飛び出して、遊んでいるんではないか、と不安になって早めに帰ってきたのだった。ピンクを抱っこした亜紀ちゃんは、ソファーに腰掛けスパイダーに尋ねた。「外に出なかったでしょうね。ピンクは犬じゃないんだから、カゼひいちゃうからね」キリッと顔を引き締めたスパイダーは、大きくうなずき答えた。「もちろん、外には、一歩も出てない。亜紀ちゃんの言いつけは、ちゃんと、守ってます。でも、ピンクが公園に行きたいって、駄々をこねるんだ。困っちゃうよ。亜紀ちゃんが連れて行ってくれよ」最近のピンクは外に出たがっていた。様子を見に来なかったら、スパイダーとピンクは、公園に行っていたように思えた。亜紀ちゃんは、じっとピンクを見つめ説教した。「そう。ピンク、外は寒いのよ。スパイダーは、犬だからいいけど、ピンクは、寒さに弱い猫なのよ。冬は家でじっとしていなさい。わかった」

納得がいかないピンクは、悲しそうな表情で亜紀ちゃんを見つめた。スパイダーは、ピンクの気持ちを代弁した。「あのね。ピンクは、お友達が欲しんだって。近所に遊び相手になってくれる猫がいないかって、聞くんだよ。オレは、猫のことはさっぱりわからないから、卑弥呼女王に聞いたらいいんじゃないか、って言ったら、ピンクが公園に行くって、駄々をこねたんだ。ピンクも遊びたい年頃だから、猫友が欲しいんだよ。亜紀ちゃん、近所の猫を知ってたら、紹介してあげてくれないか」近所の猫といわれても知っている猫は、東野君ちのチャトラのブッチャーだけだった。ブッチャーはオス猫で、近所では、評判が悪かった。というのは、精力旺盛で、発情期になるとあたりかまわずメスに襲いかかるのだった。だから、亜紀ちゃんは、ブッチャーにピンクを紹介したくなかった。

　不安げな表情をした亜紀ちゃんは、ピンクに話しかけた。「ピンク、猫だからといって、みんな優しいとは限らないの。オスの猫というのは、凶暴でメスに襲い掛かるのよ。ピンクは、まだ幼いんだから、注意しないといけないの。でも、友達が欲しのよね。あ、そうだ、明菜ちゃん、最近、親戚から猫をもらったって言ってた。名前は、イチゴって言ってたから、きっと、メスだと思う。お友達になれるといいんだけど。でも、まだ、イチゴには会ったことがないのよ。明菜ちゃんに電話してみようかな～」ピンクは、ヒョイと顔を持ち上げ瞳で催促した。明菜ちゃんちは、亜紀ちゃんちより300メートルほど南に行ったところにあった。とりあえず、自宅にいるかどうか確かめることにした。

　スマホの明菜の名前をタッチすると5回目の発信音でかわいい声が返ってきた。「はい、明菜」亜紀ちゃんは、ハキハキとした声で話しかけた。「明菜ちゃん、今日、遊べる？あのさ～、イチゴちゃんに、ピンクを紹介しようかな～～って思って。どう？」明菜は、ちょっと間をおいて返事した。「今日ね～～、今から家族で桜井神社に行くの。帰ってくるのは、5時過ぎになると思う。今日は、ダメかも。もし、早く帰ってきたら、電話する」ちょっとがっかりした亜紀ちゃんだったが、気を取り直して返事した。「わかった。電話待ってる」亜紀ちゃんは、ピンクをイチゴに会わせることができなくなり、悲しそうな表情でピンクを見つめた。会えないことを察知したピンクも悲しそうな表情で見つめ返した。

無謀な人間

　外で遊んでないピンクは、退屈しているに違いないと思った亜紀ちゃんは、ピンクに防寒着を着せて公園に行くことにした。「明菜ちゃん、今からお出かけだって。ピンク、毎日、おうちじゃ、退屈よね。ちょっとだけ、公園に行ってみるか。お外は寒いから、しっかり着込むのよ」亜紀ちゃんは、ピンクに毛糸で編まれた冬服を着せ、両手両足に毛糸靴下をはかせた。亜紀ちゃんもダウンジャケットを着こむと、ピンクを懐に押し込み気合を入れた。「よっしゃ〜、いざ、出陣。公園に行けば、卑弥呼女王に会えるかも。スパイダー、いくわよ」亜紀ちゃんが玄関に向かうとスパイダーは家来のようにシッポをフリフリお供した。

　ピンクをしっかり抱っこして公園にやってくると、寒いためか、公園で遊んでいる子供は一人もいなかった。卑弥呼女王の姿も見られなかった。「卑弥呼女王いないみたい。誰もいないね。そうよね、こんな寒いんじゃ、子供も、外で遊ばないか。おうちで、ゲームやってんだろう。まあ、いいか。澄んだ空気をいっぱい吸って、心を清めよう。ピンク、きれいな空気をいっぱい吸って、今年も、元気に育つのよ」スパイダーは、気分転換に公園を駆け回っていた。亜紀ちゃんが、スパイダーを目で追っていると凧（たこ）を持った男の子とその父親と思われる男性が、手をつないで公園に入ってくる姿が目にとまった。

　男の子は、左手に凧、右手に糸を持ち駆け足で公園の中央にやってきた。凧から左手を離すと同時に、糸を持った右手を伸ばし勢いよく走り始めた。風がないためか凧は高く舞い上がらなかったが、走っている間は、凧は、微風に乗りながら5メートルほどの高さでユラユラと舞った。「お父さん、見て」男の子は、ユラユラと舞い上がった凧を見せようと父親の前を走り抜けた。ユラユラフラフラと舞い上がる凧を見て、亜紀ちゃんも思わす歓声を上げた。「すごい、すごい。もっと、もっと、高く上がれ〜〜」その声援を聞いた男の子は、うれしくなったのか、公園の端から端まで何度も往復した。

凧を目で追っているとカ～～カ～～と聞き覚えのある鳴き声が耳に飛びこんできた。目線をあげると天高く青空に見覚えのある一羽の黒い鳥が旋回していた。亜紀ちゃんが、ピンクに声をかけた。「見て、あそこ。風来坊よ。上空から、新年のあいさつをしてるんじゃない」亜紀ちゃんは、真っ青な上空に舞う風来坊に向かって、大きく手を振った。風来坊は、亜紀ちゃんの笑顔に応えるかのようにカ～～カ～～と甲高い鳴き声を澄み切った青空に響かせた。旋回しながら下界を俯瞰（ふかん）し終えた風来坊は、ヤンチャなスパイダー、カワイ～～ピンク、亜紀ちゃんに新年のあいさつをしようといつものベンチに舞い降りてきた。

亜紀ちゃんは、白いベンチに飛び降りた風来坊に新年のあいさつをした。「風来坊、新年あけましておめでとう。今年もよろしくね」風来坊も大きく胸を張って挨拶した。「亜紀ちゃん、スパイダー、ピンク、新年あけましておめでとう。今年も、みんな仲良く、やろうじゃないか」風来坊は大きな声で挨拶するとクワワ～～クワワ～～クワワ～～と初笑いを公園に響かせた。スパイダーも元気よくあいさつした。「風来坊、明けましておめでとう。今年も、頼むよ。頼りにしてるから」ピンクも懐から顔を持ち上げあいさつした。「あけましておめでとう。よろしくね、ふ～～ちゃん」風来坊は懐から顔を出しているピンクに声をかけた。「大きくなるのが早いな～～。この前見た時には、まだ赤ちゃんだったのに」

亜紀ちゃんが笑顔で答えた。「もう、あと半年もすれば立派な大人になるんじゃない」スパイダーが口をはさんだ。「でも、ピンクはピースとは全く違うな。どうして、こんなに脚が短いんだ。ピースの半分もないんじゃないか。こんなんじゃ、喧嘩にすぐ負ける。先が思いやられる」亜紀ちゃんが同情するように返事した。「そうね。確かに短い。猫パンチできるかしら。こんなに短いんじゃ、相手に届かないよ。でも、生まれつきだからね～～、しょうがないか。スパイダー、ピンクをしっかり守ってあげてよ。頼りにしてるから」ちょっと不安だったが、パパとして守ってあげようと快くうなずいた。「わかったよ。オレ様がいる限り、指一本触れさせない。ピンク、安心しろ」

ピンクが嬉しそうに笑顔でニャ〜〜と小さな鳴き声を上げた。亜紀ちゃんは、ピンクの鳴き声でピンクの友達の件を思い出した。「ねえ、風来坊、近所に、ピンクのお友達になれそうな猫いない？ピンクが友達が欲しいって、駄々をこねてるの」風来坊は、首をかしげた。「そうだな〜〜、近所にいるのはいるが、ドスケベのブッチャーだしな〜〜。あいつじゃ、ピンクのお友達には向かない。近所でとなると〜〜？ミケのウメがいるが、耳の遠い80歳ぐらいオバ〜〜だし。キジトラのポンタは、性格はおとなしいが、ボケ気味のオスのオジ〜〜だしな〜〜。メスで友達になれそうな猫は・・あ、もしかしたら、あの猫。ここから南に、300メートルほどのところにカワイ〜子猫がいる。チラッと見たが、おそらくメスだ。ピンクより幼かったな〜。一度、訪ねてみたらいい」亜紀ちゃんは、風来坊が言っている猫はイチゴに違いないと思った。「ありがとう、風来坊。一度、行ってみる」

退屈そうに寝転がっていたスパイダーが、ヒョイと立ち上がると風来坊に尋ねた。「おい、風来坊、ここ数日、どこに行っていたんだ。見かけなかったが、東京に里帰りか？」ギャハハ〜〜と奇妙な笑い声をあげた風来坊が、返事した。「いやな、ちょっと、年末年始に発狂する日本人の生態観察をやっていた。聞いて驚くな。なぜか、この時期になると北から南、南から北へと10キロ以上のアリの行列のような車の大渋滞が起きる。車は、ほとんど動いていない。まったく、飛べない人間は哀れだ。それと、これまた、この時期だけ、神社に向かって、老若男女（ろうにゃくなんにょ）の長い行列ができる。神社につくと、あくせく働いて稼いだお金をだな〜〜、サイセン箱というやつに、ホイホイ、ホイホイ、笑顔で捨てているじゃないか。さらに、両手まで合わせて、神妙な顔つきで、お辞儀までしている。まったく、正気の沙汰じゃない。やはり、人間の知能は、カラス以下だな」

風来坊は、スパイダーが腰を抜かすような話をしてやろうと一呼吸おいて、大きな声で話を続けた。「いや、いや、大坂の様子も見てきたが、ツララができるほど寒いのに、布団も敷かず、掛け布団もかけず、ボロボロの汚い服を着たまま、路上で寝転がっている人間があちこちいた。これには、ぶったまげた。あんな無謀なことをするのは、人間ぐらいだな。凍え死んじゃうんじゃないか？まったく、人間のやることは、いまだ、よくわからん。いろんな動物を知っているが、ここまでアホなことをする動物は、人間だけだ。熊でも、秋にたくさんドングリを食って穴の中で冬眠するし、ペットの犬や猫は、あったかいおうちで寝ているというのに。ピンクなんかは、亜紀ちゃんの懐であったかそうじゃないか」

　スパイダーは、何度もうなずきながら風来坊の話に聞き入っていたが、何か犬にとっていい話はないか聞いてみた。「とにかく、人間がバカなことは確かだ。亜紀ちゃんちには、俺のケツをける鬼ババ～がいるしな。それより、何か、犬にとっていい話はないか？例えば、今年から”犬感謝の日”ができるとか。犬にステーキをプレゼントするイベントが、近々あるとか」全く食うことしか考えない気楽なスパイダーだと思ったが、ちょっと、いい話を思い出した。「そうだな～～、ないこともないぞ。犬ってやつは、おいしいらしくてな。韓国じゃ、ご馳走らしい。でもな、やっぱ、かわいそうということになって、犬は食べてはいけないことになったらしい。スパイダー、食べられずにすんで、よかったな。ワハハ～～」

　何がいい話だと思ったスパイダーは、風来坊に文句を言った。「まったく、犬を何と思ってんだ。犬ほど人間に貢献している動物はいないんだぞ。犬に感謝しない人間は、きっと、天罰が下る。その時になって、後悔しても知らんからな」風来坊もスパイダーの言ってることはもっともだと思った。犬は、ペットとして人間の心をいやし、障がい者には、目の代わり、耳の代わりをやっている。犯罪者を取り押さえる警察犬や、麻薬を鼻でかぎ分け麻薬取り締まりに役立っている犬もいる。こんなに人間に貢献している動物は、ほかにいない。「スパイダー、そう嘆くな。きっと、いつの日にか、”犬感謝の日”ができるさ。スパイダーは、猫の面倒まで見てるんだからな。いや～～、頭が下がるよ。あ、もうそろそろ、行かなくては。皆の衆、この辺で、さらばじゃ」風来坊は、パッと純白の翼を広げ、パタパタパタと飛び上がると東の青空に吸い込まれるように消えてしまった。

野生の猫

　体の震えに気づいた亜紀ちゃんは、スパイダーに声をかけた。「寒くなってきた。風邪をひかないうちに、おうちに帰ろう」亜紀ちゃんは、ピンクをしっかり抱きしめて、ピンクのようにチョコマカとかけていった。スパイダーもシッポをフリフリ、亜紀ちゃんの後を追っかけていった。道路をかけていると自宅の植木の横に二匹の黒い猫がいることに気付いた。一匹は卑弥呼女王ではないかと思いつつ、近づいてみると思った通り卑弥呼女王だった。亜紀ちゃんは、元気よくあいさつした。「卑弥呼女王、あけましておめでとうございます。お元気そうですね。ご一緒のかたは？」卑弥呼女王は、笑顔で返事した。「私の娘です。亜紀ちゃんにご挨拶させようと思い、姫島からつれてきました」気品のある顔つきの黒猫があいさつをした。「始めまして、リボンといいます。兄弟姉妹たちと一緒に、姫島で暮らしています。よろしくお願いします」

　亜紀ちゃんは、子供が姫島にいたことを知り、目を丸くした。「リボンちゃん、いい名前ね。卑弥呼女王、こんなところじゃ、寒いでしょ。おうちにどうぞ。今、おうちには誰もいないから」卑弥呼女王は、小さくうなずき、返事した。「それでは、お言葉に甘えまして、ちょっとだけ、お邪魔します」卑弥呼女王は、リボンを従えて亜紀ちゃんの後ろについておうちに入っていった。亜紀ちゃんがソファーの前で「どうぞ」と言って手を差し出すと卑弥呼女王とリボンは、ヒョイ、ヒョイとソファーに飛び乗った。ソファーに腰掛けた卑弥呼女王は、懐のピンクに目をやった。「あら、ピンク、亜紀ちゃんにかわいがられて、幸せそうね。ずいぶん大きくなったわね」亜紀ちゃんは、ピンクを懐から取り出し、ソファーに座らせた。そして、冬服と両手両足の靴下を脱がせた。

　ピンクがあいさつした。「あけましておめでとうございます。これから、ずっと、ず〜〜っと、よろしくね」卑弥呼女王は、上手に挨拶できたピンクに笑顔で返事した。「はい。仲良くしましょう。何か、困ったことがあれば、いつでも相談してね」ピンクは、早速、友達のことを相談した。「友達が欲しいの。近所に、友達になってくれる猫はいない？」卑弥呼女王は、最近、この辺りを巡回していなかったために新しい猫情報を得ていなかった。「おともだちね〜〜、ちょっと、思いつかないわね。ごめんなさい。すぐにでも、仲間から情報を集めてみるから、しばらく待ってて」ピンクは、コクンとうなずいた。

ここ最近、卑弥呼女王を見かけなかったスパイダーは、質問した。「卑弥呼女王、最近、お見掛けしませんでしたが、12月から姫島でお過ごしでしたか？」卑弥呼女王は、笑顔で返事した。「ちょっと、対馬（つしま）に小旅行をしてました。対馬にいるツシマヤマネコの諜報員に会ってきました」亜紀ちゃんとスパイダーは、孤島の対馬と聞いて驚いた。卑弥呼女王は、マジな顔つきで話を続けた。「聞くところによれば、今、野生のツシマヤマネコは、絶滅の危機に瀕しているそうです。おそらく、野生のツシマヤマネコは、50匹ぐらいではないかといってました。少子高齢化で、このままだと、後10年もすれば、絶滅すると嘆いてました」

亜紀ちゃんは、ツシマヤマネコを増やそうと、東京都、横浜市、富山市、名古屋市、京都市、福岡市、佐世保市などの動物園でツシマヤマネコの繁殖がなされていることは知っていた。でも、野生のツシマヤマネコがあまりにも少ないことに、びっくりすると同時に悲しくなった。亜紀ちゃんは、不安げな顔で質問した。「野生のツシマヤマネコを救済する方法はないんですか？とっても、かわいそう。人間が、飼うことはできないのかしら？」

卑弥呼女王は、悲しそうな表情をして返事した。「どうも、手だてがないみたいなの。動物園で繁殖がなさせているみたいだけど、野生のツシマヤマネコは、あまり繁殖していないみたいなのよ。若いツシマヤマネコが減少し、ますます出産数も少なくなり、子猫の育ちも悪いみたい。エサも少なくなっているし、ツシマヤマネコにとっては、ますます、生活環境が悪化してるといっていました。ツシマヤマネコは、性格が野性的で、人間をとっても怖がるの。だから、おうちで飼うことができないみたい。人間と共生できれば、それが一番いいんだけど。とっても、残念」

　亜紀ちゃんは、泣き出しそうな表情で話し始めた。「それって、人間が悪いんじゃない。ツシマヤマネコが住みやすい環境を作ってやらないから、ツシマヤマネコが死んじゃうのよ。まったく、何やってんのよ。卑弥呼女王、どうにかしてください。お願いします」卑弥呼女王は、大きくうなずき返事した。「今、仲間と対策を練ってるところなの。九州から対馬にエサを運べないかと対策を練ってるの。必ず、救済して見せるから、亜紀ちゃん、心配しないで」亜紀ちゃんは、少し笑顔を作った。「ありがとう。亜紀にも手伝えることがあったら、何でも言って、頑張っちゃうから」一呼吸おいて卑弥呼女王は、顔を曇らせ話を続けた。「もっと絶滅に瀕しているのが、イリオモテヤマネコなのよ。動物園での繁殖はなされてないし、このままだと絶滅するのは、時間の問題。台湾近くの西表島は、猫にとっては遠すぎて、援助もできないし」

　スパイダーもシッポをフリフリ、エールを送った。「卑弥呼女王、頑張ってください。僕もお手伝いします。何でもお申し付けください。でも、問題なのは、人間だと思うな。島の開発だといって森林を伐採したり、無責任な観光客が野生のネコを車ではね殺したり、全く、人間は、自然を何だと思ってるんだ。ほら、身近に動物愛護精神のない鬼ババ〜のようなのがいるじゃないか。ああいうのがいるから、ツシマヤマネコもイリオモテヤマネコも人間を怖がって、人間と一緒に暮らそうとしないんだ。そう、あの鬼ババ〜、俺をじっと見つめ、食ったら旨そうだな〜〜、とか、あの忌々しい白いカラスは、いつか撃ち落としてやる、なんてことも、言ってた。まったく、極悪非道の鬼ババ〜〜だ」

　亜紀ちゃんは、鬼ババ〜と聞いて、アンナが帰ってくるような不安が込み上げてきた。知らない黒猫が二匹もソファーにいたら、悲鳴を上げて追い出すように思えた。「卑弥呼女王、もしかすると、ママが帰ってくるかもしれない。ベランダから、帰ってください。うちのママは、結構、凶暴なんです」卑弥呼女王は、目を丸くしてソファーからピョンと跳び降りた。リボンも後に続いてピョンと跳び降りた。「ちょっと、長居してしまったわ。みんなとお話しできて、楽しかったわ」亜紀ちゃんが、ガラス戸を開けると卑弥呼女王とリボンは、ベランダにヒョイ、ヒョイと飛び降り、そそくさと小走りで消えた。その時、ガラガラと玄関の開く音がした。間一髪で間に合ったとホッとした亜紀ちゃんは、玄関にかけていった。

　さやかに後片づけを任せたアンナは、一足先に自宅に帰ってきた。玄関でお迎えした亜紀ちゃんに声をかけた。「今日は、もう、店じまい。いつも、午前中に、このくらいお客が来てくれるといいんだけど。亜紀、ピンクは、大丈夫だった？」亜紀ちゃんは、笑顔で返事した。「スパイダーとピンク、ちゃんとお留守番してた。お利口さんだったよ」アンナは、返事もろくに聞かず、さっさと、キッチンに歩いて行った。スパイダーの顔を見るなり声をかけた。「最近は、おりこうさんになったじゃない。バカと思ってたけど、そうでもなかったのね。ヨシヨシ」スパイダーは、口の悪いアンナにムカついたが、ご褒美をもらおうとシッポをフリフリ愛想を振りまいた。亜紀ちゃんは、スパイダーの気持ちを察し、アンナにおねだりした。「スパイダー、すっごく、ピンクの面倒見てくれるの。何か、ご褒美あげてよ」

　アンナは、スパイダーをチラッと見て返事した。「そうね～、お正月でもあるし。奮発してやるか。佐賀牛のステーキを食わしたるか。スパイダー、今夜はご馳走よ。待ってな」スパイダーは、ステーキを思い浮かべて、ヨダレをたらしてしまった。亜紀ちゃんは、アンナがスパイダーのことを認めてくれたことにホッとした。「スパイダー、夕飯まで、二階でピンクの遊び相手をしてちょうだい」スパイダーに声をかけた亜紀ちゃんは、ピンクを抱っこすると二階のペットルームに向かった。ピンクをペットルームのフロアにおいて部屋から出た時、拓実が階段を上がってきた。そして、何も言わず、カラオケルームに入っていった。亜紀ちゃんがキッチンに戻ってくるとアンナとさやかが楽しそうに大きな声で会話していた。お客が多かったことで喜んでいるに違いないと思った。キッチンの壁時計に目をやると2時を少し回っていた。

　亜紀ちゃんは、さやかに声をかけた。「さやかお姉ちゃん、今日は、お客さんが多くて、よかったね」さやかが、笑顔で返事した。「ほんと、びっくりするぐらい多かった。亜紀ちゃんがお手伝いしてくれたから、すっごく、助かったわ。ありがとう。拓実君がお手伝いできるようになったのも、亜紀ちゃんのおかげ。アンナも一安心ね」アンナが、ちょっと不安げな顔で返事した。「ま～ね、元気がいいのはいいけど、ズボンの上にスカートを穿くってのは、どうかしらね～～。お嬢ちゃん、かわいいね、なんて言われたんでしょ、いやになっちゃう。髪が長くて、スカートをはいてりゃ、お客は、女の子と思うわよ。これからどうなることやら。先が思いやられるわ。スカートをはいて、小学校に行くなんて言い出したら、どうすりゃいいの？まったく」

来年、拓実が小学生になることを考えると、アンナの心配はますます大きくなっていた。拓実は、女の子になりたく、髪を伸ばし、家ではスカートをはいていた。今後、女の子になりたい気持ちがますます強くなって、小学校にスカートをはいていくのではないかと不安になっていた。「さやか〜、拓実、どうとにかならないのかしら？あんなんじゃ、小学校に行けないかもよ。いやになっちゃう」拓実をかばうように亜紀ちゃんが、口をはさんだ。「ママ、いいじゃない。女の子みたいでも。芸能人でも、いるじゃない。マツコさんとか、イッコーさんのようなオカマというか、ニューハーフが」アンナが、全く分かっていないという顔で話し始めた。「あのね〜、あの人たちは、芸能人だから、いいのよ。拓実は、そこいらのガキじゃない。男子が、髪を伸ばして、女子みたいだったら、いじめられるに決まってるじゃない。不登校になるわよ」

さやかがアンナをなだめるように話し始めた。「アンナ、そう、気をもむことないって。今だって、幼稚園にはズボンで行ってるじゃない。髪は伸ばしているけど、男子は髪を短くしたほうがかっこいいといえば、切るわよ。そう、心配せずに、その時になれば、どうにかなるって。アンナ」アンナが、口をゆがめて反論した。「さやか、あんたは、子供がいないから、他人事でいられるのよ。拓実は、女の子になりたいって言ってるのよ。ズボンは、はかせることができても、髪を切るように言っても、切らなかったらどうすんのよ。あのままじゃ、女子じゃない。先生もきっと注意するわよ」

亜紀ちゃんも心配はしていたが、どうにかなるように思っていた。「ママ、いいじゃない。髪が長くても。長髪の男子は、いるんだし。先生やお友達もわかってくれるよ。亜紀は、カワイ〜〜拓実が大好き」アンナは、さやかも亜紀も全く世間がわかっていないと思った。「さやかも亜紀も、全く分かっていない。拓実は、髪が長いだけじゃないのよ。顔が女子なんだから。今日でも、お客さんから、お嬢ちゃんかわいいね〜、って言われて、ニコニコしてたんでしょ。早い話、拓実は、いじめの対象になるってことよ。きっと、いじめられて、学校に行きたくないって言い始めるから。ひきこもりになったら、最悪。あ〜〜、どうして、あんな子が生まれたの？原因は、拓也よ。拓也が、オカマだったから、拓実までオカマになったのよ。あ〜〜拓也のバカ」

さやかが、ちょっとムキになってアンナに文句を言った。「何言ってるの。拓也のせいじゃないわよ。拓也が好きで結婚したんでしょ。そんなこと言うもんじゃないわよ。拓也との楽しかった思い出は、たくさんあるじゃない。アンナは、心配性なのよ。拓実が、駄々をこねたら、さやかが、学校に連れて行ってあげるから、安心して」亜紀ちゃんも、アンナはちょっと心配しすぎだと思った。万が一、不登校になったら、フリースクールに行けばいいと思った。そして、歌手を目指せばいいと思った。「ママ、拓実は、歌手になりたいのよ。ほら、三輪さんとか、美川さんとか、ピーターさんとか、オカマ歌手が、いるじゃない。拓実、きっと歌手になれると思う。亜紀、拓実を応援する」

目を吊り上げたアンナは、怒鳴るように言った。「何、バカなこと言ってるの。歌手になんか、なれっこないでしょ。男子の魅力は、武力よ。早速、空手でも習わせなくっちゃ。この世の中、理屈じゃないのよ。いざとなれば、腕っぷしがものをいうの。生き残りたけりゃ、喧嘩に勝つことよ。ママなんか、負けたことないんだから」自慢げに話すアンナを見つめて、さやかは、あきれた顔で話し始めた。「ちょっと、拓実は、アンナと違うのよ。拓実には、拓実の良さがあるの。たとえ、喧嘩が弱くても、歌が得意であればいいじゃい。歌手になれなくても、趣味があるってことは、いいことよ。拓実が、空手をやりたいっていえば、やらせてもいいと思うけど、無理矢理にやらせるのは、どうかと思うよ。大切なことは、拓実の気持ちを聞いてあげることじゃない」

説教されたアンナは、ちょっとムカついたが、さやかが言っていることも、もっともに思えた。オカマの拓也を好きになったのは、事実だし、オカマの子供が生まれたからって、腹を立てるのは滑稽に思えてきた。「そうね。オカマでもいいか。もし、いじめられるようだったら、学校なんて、行かなくていい。さやかも、ママも、ろくに中学校、行ってないし〜。でも、さやかと二人で、ここまで生き抜いてきたんだもの。そう、拓実がやりたいことをやらせればいい。拓実の道は、拓実が決めればいい。なんか、拓也がそういってるような気がする。今思えば、拓也の世間にとらわれない自由な発想が、好きだったような気がする。さやかも、そうだったんでしょ」

さやかは、拓也のことを思い出した。拓也は、施設育ちで、ろくに学校も行ってない二人にやさしかった。世間では軽蔑の目で見られていたが、拓也は、違っていた。軽蔑もしなかったし、差別もしなかった。なぜそうだったのかは、わからなかったが、間違いなく、世間の目とは違っていた。二人が、マジ心を許せたのは、拓也だけだった。今思えば、不思議に思えた。拓也は、今では、性転換して、女性として生きている。もしかしたら、拓実も将来、性転換して、女性になるかもしれない。親子の因縁を感じた。「アンナ、自分たちだって、ろくに学校も行ってないゴロツキじゃない。今まで、どんなにつらいことがあっても、二人で力を合わせて、どうにか乗り越えてきたんだし。生きるって、そういうものよ。アンナ、亜紀ちゃん、みんなで力を合わせて、拓実を育てようじゃない。きっと、天国の拓也も、そう願っていると思うよ」

アンナは、子供のころを思い出しているとなんだか今の悩みがバカらしくなった。それより、これからの自分のやるべきことを考えるべきだと思えた。ちょっとマジになったアンナは、さやかと亜紀ちゃんに呼びかけた。「今日は、お正月よ。今年の抱負を述べましょう。まずは、さやかから発表してください」さやかは、突然、抱負といわれても、はっきりとした計画は立てていなかった。でも、全国の児童養護施設を慰問したいと考えていた。「え、私から。はっきりとした具体的な計画はまだだけど、今年は、全国の児童養護施設を訪問したいと思っています。看護師としてだけではなく、子供たちに歌を歌ってあげようと思います。今のところは、こんなところかな」

アンナが、亜紀ちゃんに視線を移した。「それじゃ、次は亜紀ね。勉強のこと以外の抱負を言ってよ。亜紀は、勉強しすぎなんだから」亜紀は、勉強以上にやりたいことがあった。それは、小説を書くことだった。将来は、AIシステムの研究をしたいと思っていたが、小説家にもなりたかった。「今年から、できる限りたくさん、短編小説を書きたいと思います。小説を書くことは、AIシステムの研究にも役に立つと思うの。次は、ママね」アンナは、大きな胸を突き出し、目が飛び出さんばかりに見開いて、目をピカピカッと輝かせ、選手宣誓するように大きな声で、抱負を述べた。「ママの今年の抱負は、今年の抱負は、ハヤブサで、いろんなところに行って、おいしいものを食べることで〜〜す」

さやかと亜紀ちゃんは、あきれた顔で見つめあった。でも、即座に、アンナらしくていいとさやかには思えた。亜紀ちゃんが、アンナの抱負に文句をつけた。「ママだけが、おいしいものを食べに行くってこと。私たちは？」アンナが、マジな顔で返事した。「ママは、一人旅がしたいのよ。当然、みんなとも、一緒に食事に行くわよ。でも、一人旅をして、もう一度、自分を見つめたいのよ。いいでしょ」さやかは、アンナの気持ちがよく分かった。最近のアンナは、何か自分を見失っているような気がしていた。拓実が生まれ子育てに追われ、ストレスがたまり、毎日イライラして亜紀ちゃんにまで八つ当たりをしていた。気分転換には、一人旅はいいことだと思えた。

亜紀ちゃんが、思い出したように話し始めた。「拓実の抱負は何だろうね？」アンナが、即座に答えた。「拓実は、歌以外ないじゃない。聞いたってしょうがいわよ。まったく、極楽トンボなんだから。なんだか、最近、ますます、拓也に似てきてない。やっぱ、親子ね。ところで、さやか、全国の児童養護施設を回って歌を歌うって言ってたけど、子供向けの歌って、歌えるの？」さやかが、ニコッと笑顔を作って返事した。「歩くカラオケマシーンがあるでしょ。こういう時に役に立つのよね〜〜」アンナには、意味がピンと来なかった。「何よ、歩くカラオケマシーンって？」

さやかが亜紀ちゃんを覗き込みニコッと笑顔を作った。「亜紀ちゃんは、わかるよね」亜紀ちゃんは、ピンときた。歌とくれば、拓実しかいない。「なるほど。それって、いいかも。ママ、身近にいるじゃない、歩くカラオケマシーン。ほら。いつも歌っている我が家のアイドルが・・」アンナは、拓実のことではないかと思い、目を丸くして確かめるように尋ねた。「まさか、拓実じゃないでしょうね」さやかが、ポンと両手を打ち鳴らして返事した。「ズバリ、その通り。拓実君を連れていくの。きっと、子供たち喜ぶと思う。拓実も行きたいって、言ってたし」アンナは、目を吊り上げて反駁した。「何、バカなこと言ってるの。拓実は、旅芸人じゃないのよ。さやかは、いつも自分勝手なんだから」

亜紀ちゃんがアンナをなだめるように話し始めた。「ママ、名案だと思う。拓実は、人前で歌うのが好きなのよ。美空ひばりもちっちゃいころから、みんなの前で歌っていたというじゃい。いいでしょ、ママ」アンナは、自分がのけ者にされたと思い、ヒステリックな声を発した。「まったく、亜紀まで何言うの。天才美空ひばりと拓実を一緒にするんじゃないわよ。拓実は、凡人で、ボ〜〜とした幼稚園児なのよ。万が一、旅先で病気にでもなったらどうすんの。まったく、さやかも亜紀も、無責任なんだから」

さやかは、拓実と二人で旅行をしたことがなかった。だから、心配でもあったが、なぜか、拓実とうまくやれそうな気になっていた。「アンナ、そう心配しないでよ。ちゃんと面倒見るから。健康管理もちゃんとやるし。長くても、2泊3日ってとこよ。遠方には、ひと月に一回ぐらいにするから、いいでしょ、アンナ。お願い」さやかは、両手を合わせてアンナを見つめた。アンナは、かつてのお願いが始まったと思った。最後には、お願いするさやかにいつもムカついていたが、やっぱりこの癖は治ってないとあきれ返った。

アンナは、結婚できないさやかに口をとがらせて嫌味を言った。「また、お願い。さやかね〜〜、結婚したこともなければ、子供を産んだこともないのよ。育児をやったことがないさやかに、拓実の面倒を見れるわけないでしょ。拓実は、オモチャじゃないんだから。いい加減にしてよ。要は、拓実を自分の子供にしたいんでしょ。亜紀を洗脳して、拓実まで洗脳する気。いったい、何を考えてるの。そんなに子供が欲しけりゃ、結婚すればいいじゃない。世の中広いんだから、さやかでもいいっていう、変人がいるわよ」

亜紀ちゃんは、また、喧嘩が始まったとうんざりしてきた。二人の仲を取り持つように話し始めた。「ママ、そう、ムキにならないでよ。さやかおねえちゃんは、そんなつもりじゃないのよ。拓実の長所を活かしてあげようと考えてくれたのよ。拓実だって、喜んでいるし、6歳なんだから、結構自分のことはできるんだから。バカに見えるけど、そこそこ賢いんだから。ママ、大丈夫よ。拓実、きっと、美空ひばりみたいになれると思う。亜紀からもお願い。この通り」亜紀ちゃんも両手を合わせて頭を下げた。アンナは、亜紀をにらみつけた。ついに、亜紀はさやかに洗脳されたと思った。腕組みをしたアンナは、鬼の形相で話し始めた。「そこまで言うのだったら、全責任は、二人にあるってことね。いいでしょう。万が一、旅先で病気にでもなったら、即刻、施設慰問は中止ってことでいいわね。二人とも」

さやかと亜紀ちゃんは、見つめあって拍手した。亜紀ちゃんは、アンナにお礼を言った。「ママ、ありがとう。拓実、きっと喜ぶ」さやかは、アンナを安心させようと心意気を話した。「アンナ、安心して。ちゃんと面倒見るから。病気になんか、絶対、させないから。事故にもあわないように、気配りする。アンナの許しを得たからには、今後の慰問計画を立てなくっちゃ。この慰問には、ドクターも賛成してくれたの。だから、資金援助してくれるんだって。施設の慰問は、精神医療の一環、とドクターは言ってた。また、これからの精神医療は、薬で治療するのではなく、環境操作で精神の改善を図っていくといってた。アンナは、心配だと思うけど、拓実君の人生にとって、一つの転機になるかもしれない。アンナ、さやかに任せて」

アンナは、さやかの妄想が始まると手が付けられないとあきらめた。さやかの妄想癖は、子供の頃から変わっていなかった。「まあ、いいでしょ。ドクターも賛成というのだったら、悪いことじゃないみたいだし。でも、拓実に万が一のことがあったら、わかってるでしょうね」アンナは、握りこぶしを作って、二人の目の前に突き出した。さやかと亜紀ちゃんは、突き出されたこぶしに身を引いたが、ゆっくり大きくうなずいた。キッチンの壁時計は、すでに3時半を回っていた。アンナは、食事の支度にとりかかろうかと思ったが、何かムカムカして、そんな気分になれなかった。ちょっと、気分転換したくなったアンナは、冷たい風を切りながら、ハヤブサでぶっ飛ばすことにした。

　アンナは、拓也の遺品のヤマハXJRを大切に乗っていたが、スズキ・ハヤブサは、排ガス規制のため2018年で生産中止と聞いて、昨年の10月にXJRを売ってハヤブサに乗り換えた。アンナは、立ち上がると両手をあげて大きく背伸びした。「ちょっと、走ってくる。すぐに戻ってくるから」さやかが、注意を促した。「スピード違反しないように。オバンが捕まったんじゃ、シャレになんないよ」アンナは、さやかの忠告を無視するかのようにさっさと自分の部屋にかけていった。さやかが、愚痴をこぼした。「まったく、いつまでたっても、子供なんだから。あれでも、ママだから、あきれるわね」

　亜紀ちゃんはピンクがお友達を欲しがっていることを思い出した。「さやかおねえちゃん、ピンクがお友達が欲しいんだって」さやかは、もう一匹猫を飼いたいと言ってると勘違いして、目を丸くして返事した。「猫は、一匹で十分よ。これ以上、飼いたいって言ったら、アンナ、爆発するわよ。ダメよ」亜紀ちゃんは、即座に弁解した。「そうじゃなくて、お友達を探してるのよ。近所にいないかな〜〜って。明菜ちゃんちにいるようなんだけど、どんな猫かわかんないのよ。同じぐらいの年齢のメス猫だったらいいんだけど、クソジジ〜とか、イジワルババ〜〜だったら、困るのよね。ピンクは、世間知らずの箱入り娘だから」

　さやかは、猫の話は苦手だった。「猫のことは、全くわかんない。あ、思い出した、ほら、アンナに歯の浮くようなお世辞を言う秀樹君、去年の秋ごろ、猫を飼ってみようかな〜〜って言ってなかった。あのお調子者に聞いてみたら。すでに、飼ってるかもよ」亜紀ちゃんも言われてみたら、そんなことを言っていたことを思い出した。「そういえば、そんなこと言ってたような。早速、聞いてみる。さすが、さやかおねえちゃん。ありがとう」亜紀ちゃんは、自分から秀樹に電話したくなかったが、新年のあいさつを兼ねて、明日、ピンクのために、清水の舞台から飛び降りる気持ちで電話することにした。

猫友

1月4日（金）亜紀ちゃんは、大きく深呼吸すると「ピンクのため、ピンクのため」と心でつぶやきスマホで秀樹に電話した。発信音が3回なると秀樹の明るい声が返ってきた。「おはよ〜〜。亜紀ちゃん。今、こっちから電話しようと思ってたんだ」亜紀ちゃんは、その言葉を聞いて電話しなければよかったと思った。でも、平静を装って話を続けた。「え、あ、あけましておめでとうございます。今年もよろしく。ママが、ご馳走したいっていうものだから。それで・・」秀樹が元気よく返事した。「え、うれしいな〜〜。いや、失礼。本年もよろしく。そう、亜紀ちゃんをびっくりさせることがあるんだ。なんだと思う？」亜紀ちゃんは、全くピンと来なかったが、もしかしたら、猫のことではないかと思った。「もしかして、猫を飼ったとか」

一回で正解するとは思わなかった秀樹は、頭のテッペンから出してるような甲高い大きな声で返事した。「エ〜〜、よくわかったね。さすが、超天才亜紀ちゃん。予知能力まであるのか。まいったな〜〜。そうなんだ。顔はブサイクだけど、結構、愛嬌があるんだ。猫種は、エキゾチックショートヘア。名前は、ヒョットコ、っていうんだ」亜紀ちゃんは、内心喜んだが、名前からしてオスではないかと不安になった。「へ〜〜、秀樹君、猫飼ったの。秀樹君、猫、飼いたいって言ってたもんね。ヒョットコって、オス？、メス？、何歳？」秀樹が即座に返事した。「当然、ピンクと同じメスだよ。年齢は、ちょうど1月で1歳になるんだ。しつけもされて、おとなしくて、上品で、かわいくて、きっと亜紀ちゃん、気に入ると思うよ」

秀樹の下心が見え見えで気持ち悪かったが、ピンクのために笑顔を作って返事した。「え、そうなの。一度、見てみたいな〜〜」秀樹は、即座に、返事した。「いいとも、今から行くよ。11時ころには、着くと思うよ」別に今日でなくともよかったが、ピンクの喜ぶ顔が目に浮かぶと承諾の返事をしてしまった。「え、今から。いいけど。そいじゃ、待ってる」今年は幸先がいいと思った秀樹は、早速、ヒョットコに亜紀ちゃんちに出かけることを伝えると、ヒョットコをバスルームに連れて行った。「おめかししなくっちゃね」と声をかけると、指先で全身をもみほぐすように全身の被毛をシャンプーした。そして、シャボンをシャワーできれいに洗い落とすとドライヤーで乾燥させた。最後に、ブラッシングしながら毛並みを整え終えると顔を軽くマッサージした。”今日も、かわいいぞ、ヒョットコ”と秀樹はつぶやき、ルビーのネックレスをヒョットコの首につけた。

亜紀ちゃんは、11時ころ秀樹がやってくることをスマホで甘党茶屋の厨房にいるアンナに伝えた。「ママ、秀樹君が、11時ころやってくるって。いい？」アンナは、あきれてしまった。「11時ころ来るんでしょ。いいもないもないじゃない。お昼は、ご馳走するわよ。そういうことは、もっと早めに言いなさい。まったく」亜紀ちゃんが、さらに話を付け加えた。「それと、猫を連れてくるんだって」アンナは、口をひん曲げて返事した。「え、猫！うちは、猫カフェじゃないんだから。まったく、ピンクだけでも、手を焼いてるのに、こっちの身にもなってよ」亜紀ちゃんは、アンナの愚痴を無視するかのように、プチッと電話を切った。

11時少し前、シルバーのベンツが甘党茶屋の駐車場に入っていった。後部座席の秀樹は、ヒョットコを抱きかかえ車から降りると、駆け足で亜紀ちゃんちの玄関に向かった。秀樹は、インターホンを二度鳴らし、亜紀ちゃんを待った。亜紀ちゃんは、うれしい気持ちとイヤな気持で複雑だったが、玄関にかけていき、扉を開くと笑顔で挨拶をした。「早かったね。今年もよろしく。さ～上がって。あ、運転手のおじさんは？」秀樹が即座に返事した。「ジーは、甘党茶屋でぜんざい食べるって。それより、ほら、かわいいだろ。ヒョットコ。見てよ。ほら。ほら」秀樹は、ヒョットコを亜紀ちゃんの目の前に持って行き、見せつけた。

亜紀ちゃんは、秀樹をリビングに案内すると、二人は、ヒョットコを挟んでソファーに腰掛けた。亜紀ちゃんは、ヒョットコの頭をナデナデしながら、顔はブサイクだったが、愛嬌のある顔だと思った。でも、女の子なのにヒョットコはヘンだと思った。「ね～、ヒョットコって、ちょっとヘンじゃない。顔がブサイクだからって、この猫は、女の子でしょ。ヒョットコは、ひどいんじゃない。もっと、かわいい名前にしたら？」秀樹は、マジな顔つきで返事した。「え、ヒョットコってヘンか？女の子でも、いいと思うけど。この顔は、どう見てもヒョットコだろ。いいよ、この名前で。結構気に入ってるみたいで、ヒョットコ、ヒョットコ、って呼ぶと、ちゃんとやってくるし。いいんじゃないか」

秀樹は、女子の気持ちが全くわかっていないとつくづく思った。「秀樹君が、いいっていうんだったら。いいけど。ほんと、おとなしいね。そうだ、ピンクを紹介しなくっちゃ。ピンク連れてくる」亜紀ちゃんは、二階に階段をかけていくとピンクを抱っこして即座に降りてきた。すぐ後に亜紀ちゃんを追うように、スパイダーがゆっくり階段を降りてきた。亜紀ちゃんは、ソファーに腰掛け、ピンクをヒョットコの前に置いた。ヒョットコは、ニャ〜〜と挨拶の鳴き声を上げた。ピンクの友達になれそうな気がして、亜紀ちゃんが、笑顔で話し始めた。「ピンク、どう？ヒョットコちゃん、気に入った？」ピンクもニャ〜〜とかわいい声で鳴いて返事した。

ピンクとヒョットコは、しばらく見つめあっていたが、ピンクがヒョットコの顔をぺろぺろ舐め始めた。亜紀ちゃんは、お友達になれたと思い、うれしくなった。「ピンク、ヒョットコのこと気に入ったみたい。箱入り娘同士で、気が合うのかも」秀樹は、亜紀ちゃんの喜ぶ姿を見て、今後、亜紀ちゃんちにおじゃなする口実ができたとうれしくなった。「そう、よかった。今日から、ピンクとヒョットコは、お友達だね。これからは、ヒョットコを連れて、遊びに来るよ」亜紀ちゃんは、ちょっと嫌な予感がしたが、ピンクのためなら、我慢するかと腹を決めた。「そう、ありがとう。ピンク、お友達がいなくて、さみしがってたの。これからも、よろしく」

11時半頃、ガラガラと玄関の開く音が響いた。亜紀ちゃんは、食事の準備をするためにアンナが戻ってきたと察知した。アンナが、リビングにやってくると秀樹が即座に立ち上がり、笑顔で挨拶をした。「お邪魔してます。あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします」アンナも秀樹の笑顔に向かって、あいさつした。「こちらこそ。よろしくね。今日は、猫を連れてきたんだって。見せて」アンナは、ソファーまでやってくるとピンクの横の猫を見つめた。あまりのブサイクな顔を見て、噴き出すところだったが、グッと抑えてほめた。「あら、ユニークな顔だこと。愛嬌があって、かわいいわ。なんていう名前？」秀樹は、即座に返事した。「名前は、ヒョットコ」笑いをこらえていたが、さすがにヒョットコと聞いて、ハハ〜〜と噴き出してしまった。「ヒョットコ、確かに、ヒョットコみたいだけど、ちょっとかわいそうじゃない」

秀樹は、亜紀ちゃんもアンナもヘンだというが、ヒョットコのどこがヘンなのかわからなかった。「そうですか？ヒョットコって、いいと思うんですが。ヘンですか？亜紀ちゃんもヘンって、言うんです。顔にぴったりの名前だと思うんですが」アンナは、亜紀も同じことを言ったのかと思い、亜紀の顔を見てクスクス笑った。亜紀ちゃんが、話し始めた。「ママも思うでしょ。ヒョットコって、ひどいわよね。女の子なのよ。もっと、かわいい名前がいいと思うんだけど、秀樹君、ヒョットコがいいって」アンナも、女の子だったら、女の子らしい名前がいいような気がしたが、一度つけた名前を変えるのも難しいように思えた。「そうね、でも、ヒョットコ、が気に入ってるのかもしれないし。今のままでいいかもね。ヒョットコ」

アンナは、ヒョットコの頭をナデナデしながら、秀樹にお昼の注文を聞いた。「秀樹君、お昼は何が食べたい。ハンバーグ、お寿司、ピザ、食べたいもの何でも、言ってちょうだい」昨日、すき焼きを食べた秀樹は、ピザが食べたい気分だった。「それじゃ、ピザ、お願いします」アンナは、早速、ピザクックにLサイズのエビアボカドサーモン、トリプルトマト、を電話で注文した。アンナは注文すると後は亜紀ちゃんに任せることにした。「ママは、お店に戻るから、あとは、亜紀に任せるわよ。拓実にも食べさせてあげて」亜紀ちゃんは、元気のいい声で返事した。「はい。行ってらっしゃい」アンナは、亜紀ちゃんの返事を背にして甘党茶屋にかけていった。

亜紀ちゃんが、ヒョットコの頭をナデナデしているとセカンドラブの着メロが鳴った。「あ、明菜ちゃんから」亜紀ちゃんは、スマホを左耳に近づけた。即座に、明菜の声が飛び込んできた。「亜紀ちゃん、あけましておめでとう。今、何してる？」亜紀ちゃんは、気まずそうに返事した。「今、いまね～～、お友達が来てる。秀樹君というんだけど、猫を連れて遊びに来てる」明菜は、ちょっと、遠慮がちに返事した。「そう。うちのイチゴを紹介しようかなって思ったけど、またにするね」亜紀ちゃんは、ピンクを一刻も早くイチゴに会わせたかった。「いいのよ。気にしなくて。秀樹君の猫、ヒョットコっていうの。ぜひ、イチゴ連れて、見に来て。待ってるから」明菜は、ヒョットコと聞いて、どんな顔をしているのか、是非、見たくなった。明菜は、即座に返事した。「今から行くね。そいじゃ」

15分ほど経つと、冷たい北風が吹く中、フードをかぶった明菜が、ダウンコートの懐で小さくうずくまったイチゴをしっかり抱っこして、体を震わせながら歩いてやってきた。亜紀ちゃんちに到着すると玄関で出迎えた亜紀ちゃんに「サブ〜〜」といって、亜紀ちゃんをおいて駆け足でリビングに突進した。亜紀ちゃんも明菜を追ってリビングにかけていった。明菜は、暖房の温かさを感じるとホッとした表情で「凍え死ぬところだった」とつぶやき、懐からイチゴを取り出し、ソファーに座らせた。コートを脱いだ明菜は、ソファーにそっと腰掛けた。そして、膝の上にイチゴを乗せるとイチゴの紹介を始めた。「この子メスで、イチゴっていうんだけど、まだ、6か月。親戚のおばさんからもらったの。猫種は、サバトラ、って言ってた。3匹の中では一番小さいね。仲良くなれるといいんだけど」

笑顔を作った秀樹が、得意げにヒョットコを両手で持ち上げて紹介した。「僕のは、エキゾチックショートヘアの1歳。名前は、ヒョットコ。顔はブサイクだけど、愛嬌があるだろ。しつけもしっかりしてあるし、おとなしいから、仲良くなれるよ。ピンクとも仲良くなれたし」スパイダーの横で正座していた亜紀ちゃんが、膝の上のピンクを紹介した。「この子は、メスで10か月。まだ子供。さみしがりやで甘えん坊。去年、オリーブ園で拾ってきたんだけど、スパイダーが、実のパパのように、一生懸命、面倒見てくれたの」亜紀ちゃんは、横で寝転がっていたスパイダーの頭をナデナデした。

明菜は、ヒョットコは、オスのように思え、念のために聞いた。「ヒョットコって、オス？」秀樹が、笑顔で返事した。「いや、メス。ヒョットコって、メスにはヘンかな〜〜。亜紀ちゃんもヘンだっていうんだ。いいと思うんだけどな〜〜」明菜は、別にヘンだとは思わなかったが、オスの名前のようでメスの名前としてはふさわしくないように思えた。「ヘンじゃないけど、ヒョットコって、オスの名前に聞こえたの。メスなのね。すごく、愛嬌のある顔してるね。この顔、CMに出ている猫の顔にそっくり。亜紀ちゃんも、そう思わない」亜紀ちゃんもうなずいた。「いわれてみたら、よく似てる。ブチャカワの顔」

　秀樹がヒョットコの頭をナデナデしながら話し始めた。「やっぱし、そう思う？実を言うと、猫好きのジーがCMの猫が大好きみたいで、猫を飼うんだったら、あ〜いう猫を飼われてはいかがですか、っていうんだ。それで、猫のブリーダーに問い合わせたら、あのCMのネコは、エキゾチックショートヘアといって、今、一番、人気があるんですよ、って言われたんだ。そしたら、坊ちゃん、買うんだったら、今でしょ、ってジーがいうもんだから。すぐに、見に行ったんだ。ブリーダーのおうちで、何匹か、見せてもらったんだけど、ジーが、この猫が愛嬌があって、いいですよ、っていうもんだから、このヒョットコを飼うことにしたんだ」

　へ〜とうなずいた明菜が、亜紀ちゃんに質問した。「ピンクは、とっても脚が短いけど猫種は何？」亜紀ちゃんもわからなかったため、検診に行ったときに獣医に確認した。「獣医さんに教えてもらたんだけど、猫種は、マンチカンだって。この猫、捨て猫と言ったら、獣医さんびっくりしてた。脚の短いマンチカンは、人気があって、高価な猫なんだって。捨てる人はいないんだが、っていってた。とっても、不思議がってた」明菜も捨て猫にしては、かわいいと思った。「こんなかわいい猫、だれが捨てたんだろう？きっと、たくさん生まれたから、捨てたのかな〜〜」秀樹が口をはさんだ。「そうだな〜〜。捨てたというより、かわいい猫だから、誰かが拾ってくれるんじゃないかと思って、おいて行ったんじゃないか？現に、亜紀ちゃんが、育ててるし」

　明菜が表情を曇らせ話し始めた。「でも、拾ってくれる人がいなかったら、餓死してたかもしれないね。今、猫や犬を捨てる人が多いんだって、おばさんが言ってた」毎年、数万匹の猫や犬の殺処分が問題になっていた。ノラ猫も増加している。結局、育ててくれる引き取り手がなければ、捨てられることになる。ピンクは、幸運だったのかもしれない。ピンクは、誰かが拾ってくれることを期待されて、捨てられたのかもしれない。でも、亜紀ちゃんにとっては、ピンクは、神様がくれたプレゼントのようにも思えた。ピースがなくなって悲しんでいる亜紀を元気づけてあげようと人間の気持ちがわかる風来坊がプレゼントしてくれたのかもしれないと思った。「あのね〜〜、ピンクは、オリーブ園の片隅で、ボッチでニャ〜ニャ〜泣いてたんだけど。もしかしたら、風来坊のプレゼントじゃないかと思ってるの。亜紀ね、ピースが天国に行って、メソメソ泣いていたから」

秀樹は、風来坊というのは、ホームレスのことだと勘違いした。「風来坊って、だれだよ。もしかして、ホームレス。ホームレスが高価な子猫を捨てたってことは、どこからか盗んできたってことじゃないか。それは、犯罪じゃないか。こんな田舎にも、ホームレスがいるのか」亜紀ちゃんは、風来坊のことは、話したくなかった。風来坊は、カラスだと言ったら、二人に笑われるような気がしたからだ。でも、風来坊と口走った手前、引っ込みがつかなくなってしまった。このままだと、ホームレスが悪者になってしまうようで、ホームレスの人たちに申し訳ないような気持になった。

亜紀ちゃんは、笑われることを覚悟で話すことにした。「あのね〜。風来坊って、ホームレスじゃなくて、お友達のカラスなの。だから、今のは、亜紀の単なる作り話。秀樹君、本当に、風来坊って、カラスだから」亜紀ちゃんは、作り話を言ったつもりだったが、これは事実だった。風来坊は、亜紀ちゃんのために、飼い主が目を離した一瞬のスキをついて、数匹いる子猫の中から狙いをつけていた白い子猫をサッとわしづかみにして、誘拐したのだった。そして子猫がオリーブ園に捨てられたかのように見せかけたのだった。

秀樹は、最初、冗談の作り話だと思ったが、ありえないこともないと思った。秀樹はマジな顔で返事した。「カラスか。いや、考えられないこともない。カラスだったら、子猫ぐらい、簡単に持ち上げれる。知能実験でわかっているんだけど、カラスは、動物の中でもかなり賢いんだ。子供のおもちゃ、人の帽子、ゴルフボールなどをくわえて、飛んで行ったりするらしい。カラスの中には、九官鳥のように、簡単な言葉だったらしゃべれるのもいるらしい。そうさ、人間にとっては高価な猫であっても、カラスにとっては、単なる猫だ。遊びのつもりでさらったに違いない。亜紀ちゃん、それって、当たってるかもしれない。さすが、亜紀ちゃん、カラスの生態も研究してるのか。恐れ入った」秀樹が作り話をマジに受け取ってくれたことでホッとした。

亜紀ちゃんが、ふと、ピザを注文したことを思い出した時、インターホンが鳴った。「あ、ピザクック」亜紀ちゃんは、玄関にかけていった。ピザを受け取ると大声で秀樹を呼んだ。「秀樹、手伝って」秀樹は、亜紀ちゃんの執事のように一目散にかけていった。「お、Lが二つも。スゲ〜」亜紀ちゃんと秀樹は、それぞれ一つずつ抱えてキッチンに向かった。ピザをテーブルに置くと亜紀ちゃんは明菜を呼んだ。「明菜ちゃん、ピザ、みんなで食べよ。あ、拓実も呼んでこなくっちゃ」亜紀ちゃんは、二階に階段をかけていった。しばらくすると亜紀ちゃんの後ろから、スカートをはいた拓実が手すりに手をかけて、ゆっくり階段を降りてきた。

亜紀ちゃんは、4人分のグラスと取り皿を食器棚から取り出しテーブルに並べ、フレッジからペットボトルのオレンジジュースを取り出した。そして、オレンジジュースをグラスに注ぎ、各人の前に差し出した。そして、亜紀ちゃんと秀樹は、同時にピザの箱を開けた。秀樹が歓声を上げた。「ワオ〜〜、アボカドだ。大好物なんだ。そっちは、トマトか。さあ、分けよう」秀樹が手際よくピザを取り皿に取り、声をかけた。「乾杯だ。グラスを取って」みんながグラスを持ち上げると乾杯の音頭を取った。「それじゃ、新年を祝って、乾杯しよう。ピンク、イチゴ、ヒョットコ、が元気よく育ち、仲良くなれますように。カンパ〜〜イ」四人は、グラスを響かせ、早速、ピザにパクついた。拓実も上手に食べれるようになり、小さな口でモクモクと食べ始めた。3匹の猫たちは、仲良くソファーで遊んでいた。

秀樹が明菜に話しかけた。「明菜ちゃんちは、近所なの？」明菜が笑顔で返事した。「ここから300メーターほど南。歩いて、10分ぐらい」さらに質問した。「中学校はどこに行くの？」明菜が即座に返事した。「糸島東中学校」亜紀ちゃんが、話に割って入った。「明菜ちゃんは、アイドルユニットITS8のメンバーなのよ。今、研修生なのよね」明菜はうなずいた。秀樹は、目を丸くして返事した。「こんな、田舎にもアイドルユニットがあるのか。糸島も捨てたもんじゃないね〜〜」亜紀ちゃんが、大きな声で叫んだ。「明菜ちゃん、将来TVに出るかも」秀樹が、目を丸くしてエールを送った。「ワオ〜〜、その時は、ペンライト振って、応援するよ」

拓実も、口をモグモグさせながら話に割って入ってきた。「僕もアイドルになるんだ〜〜。早く、大きくなりたいな〜〜」秀樹が、拓実の顔を覗き込み返事した。「まあ、確かにかわいいけど、ちょっと、オカマっぽいな〜〜。でも、今、美少女系の男子が受けてるんだ。運が良ければ、将来、ブレイクするかも。その時は、お兄ちゃん、応援するし。夢は、デッカク。ガンバ」拓実は、ガンバ、と聞いて、笑顔でうなずいた。食事を終えた拓実は、「ごちそうさま」と小さな声で言って二階に上がっていった。ピザはまだ残っていたが、お腹いっぱいになった三人は、両手を合わせて「おごちそうさま」と言った。

亜紀ちゃんが、ソファーの猫たちを見つめて話し始めた。「猫ちゃんたちにも、キャットフードをあげようか。二階に、キャットフード、たくさんあるから。イチゴは、もう普通のキャットフード、食べれる？」明菜は、即座に返事した。「柔らかくすれば、もう、食べれる」亜紀ちゃんは、二階に階段をかけていった。キャットフードをプラスチックのボールに入れて戻ってきた亜紀ちゃんは、キャットフードに水を足して少し柔らかくした。お皿にキャットフードを盛り付けるとフロアに並べた。「みんな、お食べ」三匹の猫をフロアに下ろすとお腹がすいていたようでモクモクと食べ始めた。

猫たちがキャットフードを食べ始めた時、ガラガラと玄関の扉が開く音が響いてきた。「あ、ママだわ」しばらくするとアンナがキッチンに現れた。「みんな、ちゃんと食べた？拓実も食べた？あら、明菜ちゃんも来てたの。みんなで新年会ってわけね」亜紀ちゃんが、即座に返事した。「拓実にも食べさせた。ピザ、とってもおいしかった」秀樹が、直立不動でお礼を述べた。「とってもおいしかったです。さすが、亜紀ちゃんのママ。アボカドは、大好物なんです」亜紀ちゃんのためにアボカドを注文したのだったが、秀樹の喜びに笑顔でうなずいた。「そう。それはよかった。今日は、早めに店じまいして、運転手さんと私たちは、甘党茶屋で食事したわ。まあ、猫が3匹、猫カフェみたいね」亜紀ちゃんが、笑顔で話し始めた。「3匹ともメスで、みんなお友達になれそう。三姉妹って感じ。ピンク、喜んでるみたい」

運転手のジーのことを思い出した秀樹が、アンナに挨拶をした。「今日は、ご馳走いただきまして、ありがとうございました。ジーも待ってることだし、失礼します。亜紀ちゃん、時々、ヒョットコを連れてきてもいいかな～？ヒョットコ、友達ができて、うれしそうだったし」亜紀ちゃんが、明るい声で即座に返事した。「ぜひ連れてきて。ピンクもお友達ができて喜んでいるみたい。今日は、三姉妹記念日ね」秀樹が帰ると聞いて明菜もあいさつした。「ピザ、とってもおいしかったです。イチゴもお友達ができて喜んでいるみたい。これからも、仲良くね、ピンク、ヒョットコ。私も、失礼します」

秀樹はヒョットコを、明菜はイチゴを抱っこすると玄関に向かった。亜紀ちゃんは、ピンクを抱っこして表の通りまで見送りに出た。表の通りに秀樹が姿を現すと車の中で待っていた運転手が、息を切らせながらかけてやってきた。「坊ちゃま、お帰りですか。今日は、ご馳走していただきまして、ありがとうございました。今後とも、坊ちゃんをよろしくお願いします。明菜は、秀樹が運転手付きのお坊ちゃまと知って、目を丸くして秀樹の顔を覗き見た。秀樹は、照れくさそうに頭を掻きながら、「そいじゃ」と言って、運転手と一緒に駐車場に向かって歩き出した。明菜も「ピンク、さよなら」と言って南に向かって歩き出した。ピンクが懐から頭を持ち上げ、ニャ～～と鳴いたとき、亜紀ちゃんが、ピンクの気持ちを代弁して大きな声で叫んだ。「イチゴ、ヒョットコ、また、遊ぼうね～～」振り向いた明菜と秀樹は、大きく手を振った。